朝の法話　第十回　九月六日

全校のみなさん、おはようございます。

二学期が始まりました。一年生は東本願寺研修、二年生は修学旅行といった大きな行事があります。

特に東本願寺研修は、近隣の高校にはない、伊那西高校だけの特別な行事です。なぜこのような行事があり、わざわざ京都の東本願寺まで泊まりに行くのか、そのようなことを、伊那西高校に身を置くひとりとして考えたいものです。

伊那西高校と東本願寺は、学校とお寺で形は違えども、願いとしていることは同じなのです。そのことを確かめに行くのが東本願寺研修の目的のひとつです。

では、その「願い」とは何なのでしょうか。

二〇一一年、東本願寺では、親鸞聖人がお亡くなりになって七五〇年の節目として、親鸞聖人七五〇回御遠忌が厳修されました。その法要のテーマとして掲げられたのが「今、いのちがあなたを生きている」というスローガンです。

このテーマを聞いて、言葉に違和感を持つ人もいるかもしれません。それは「いのちがあなたを生きている」という部分についてではないでしょうか。

「いのち」と「あなた」の順序が反対で、「あなたがいのちを生きている」と言われたほうが自然に感じますね。

よく私たちは「私のいのち」という言い方します。このことから、どこかで私たちは「いのち」というものが、「私」という個人の所有物であるかのように考えているのだろうと思います。ですから、「私のいのちは私のものだから、私の好きにしていい」と考えることもあります。しかし、「いのち」とは私たち個人の所有物なのでしょうか。

「いのちがあなたを生きている」という言葉は、「いのち」を自分の持ち物にしようとする私たちの考え方を根本から揺さぶるものです。

「私の」と考えてしまうことによって、「私」という小さな世界の中に「いのち」というものを閉じ込めてしまうことになるのではないでしょうか。また、そのことによって、「いのち」の本来の願いというものを見失ってしまうのではないでしょうか。そういうことを問われているのが、伊那西高校であり東本願寺という場所なのです。